

社会技術研究開発事業
令和5年度研究開発実施報告書

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」
「すべての子どもの社会的孤立・孤独・排除を予防する
学校を中心としたシステムの開発」

山野 則子

大阪公立大学 大学院人間社会システム科学研究科 教授

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の具体的内容	2
2-1. 研究開発目標	2
2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン	2
2-3. ロジックモデル	3
2-4. 実施内容・結果	4
2-5. 会議等の活動	14
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	14
4. 研究開発実施体制	15
5. 研究開発実施者	16
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	18
6-1. シンポジウム等	18
6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	18
6-3. 論文発表	18
6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	19
6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等	19
6-6. 知財出願	19

1. 研究開発プロジェクト名

すべての子どもの社会的孤立・孤独・排除を予防する学校を中心としたシステムの開発

2. 研究開発実施の具体的内容

2-1. 研究開発目標

本プロジェクトで達成する目標は、すべての子どもが通う学校を対象に、第1は子どもの見えない貧困やストレスをスクリーニングで把握すること。これはつまり、子どもが抱える課題によって、子どもの社会的孤立・孤独・社会的排除が生じるバリエーションを捉えることである。第2はスクリーニングの浸透によって、学校組織に変化：教師が抱えこまず方策も組織決定できるようになること。これは、例えば居場所などにつながれないという子どもの社会的孤立・孤独・排除を解消することにおいて効果的となる地域資源や人材への選択肢をAIシステムによるスクリーニングによって提示するシステムを構築することである。第3は学校として地域資源を知り活用できるようになることである。(SDGs目標1, 3, 4, 5, 10, 11, 16, 17)

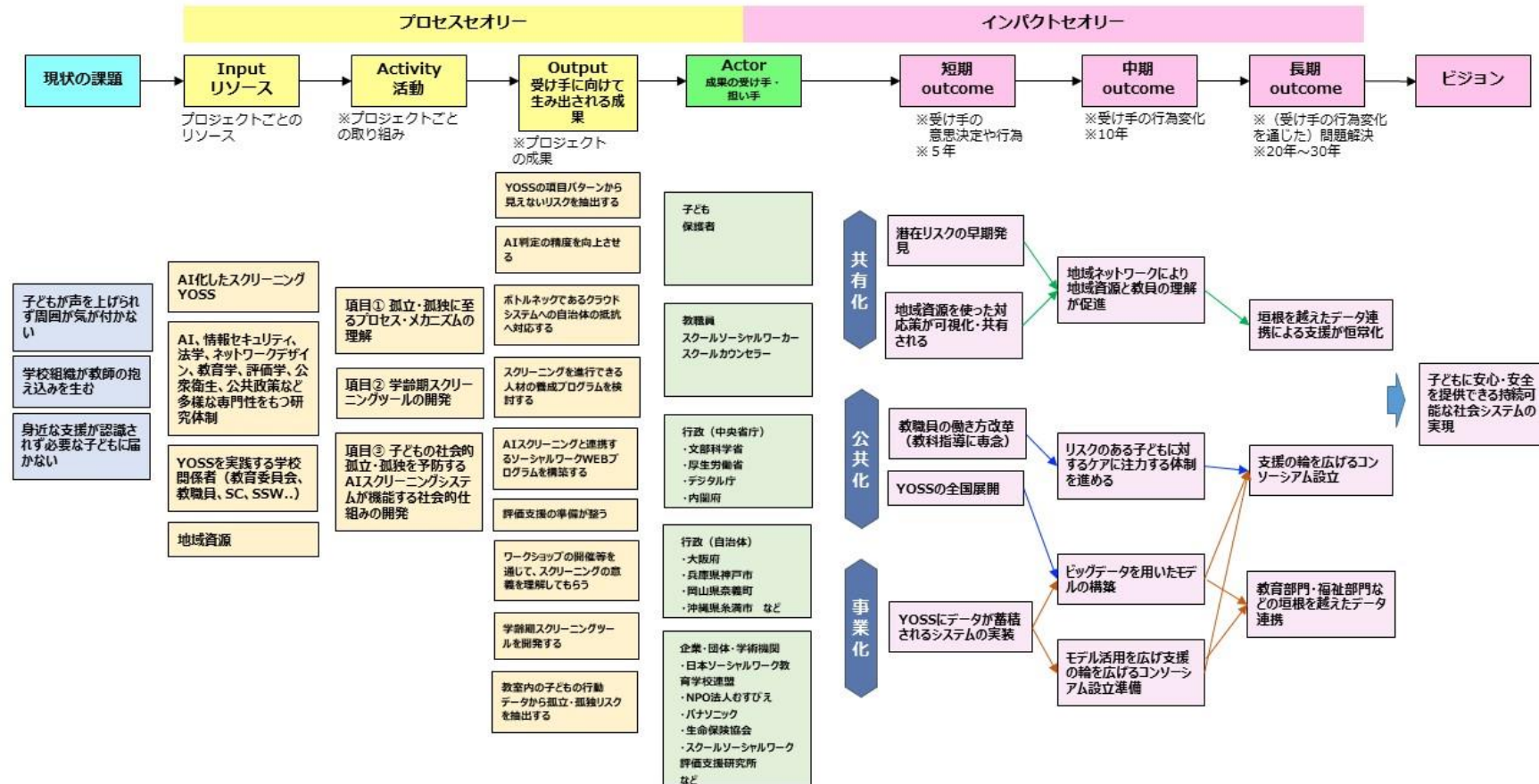
これらの目標を達成するために、Ⅰ) 学校においてAIスクリーニングの実用化、Ⅱ) 教育行政・教師・SSW・SSWのSV・地域資源のネットワークの構築、Ⅲ) バックアップするために体制構築を行う。(全体研究開発計画書「1-3.PoCの実施を含め、プロジェクトで達成する目標」から転記)

2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン

- Q1. 子どもの社会的孤立・孤独に至るプロセス・メカニズムの解明
- Q2. 評価手法としての学齢版スクリーニングツールの開発
- Q3. 子どもの社会的孤立・孤独を予防するAIスクリーニングシステムが機能する社会的仕組みの開発

2-3. ロジックモデル

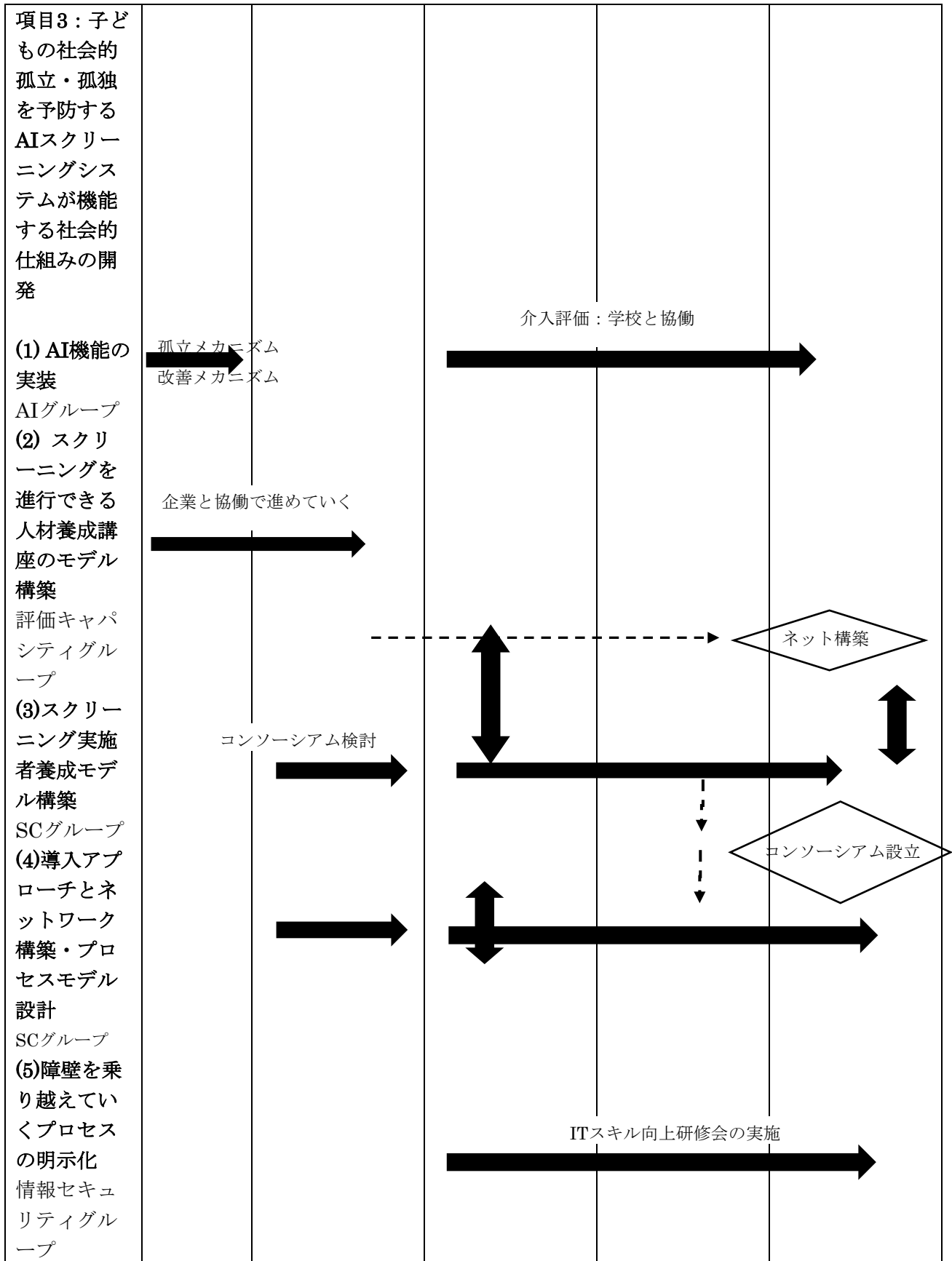
SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)
 「すべての子どもの社会的孤立・孤独・排除を予防する学校を中心としたシステムの開発」ロジックモデル



2-4. 実施内容・結果

(1) スケジュール

実施項目	初年度 (2021年11月 ~2022年3月)	2年度 (2022年4月 ~2023年3月)	3年度 (2023年4月 ~2024年3月)	4年度 (2024年4月 ~2025年3月)	最終年度 (2025年4月 ~2026年3月)
項目1：孤立・孤独に至るプロセス・メカニズムの理解 (1) 孤立・孤独に対するリスク要因間の関連分析 スクリーニング(SC)グループ				メカニズム検証	
項目2：学齢版スクリーニングツールの開発 (1) 子どもの主観も含む項目から支援の方向性を示唆するアルゴリズムのアップデート AIグループ (2)項目の分析 SCグループ (3)教室內における子どもの行動データ②の取得と分析 センシンググループ			研究協力先検討	コロナ禍の影響を踏まえた機械学習アルゴリズムの適応 実証実験	



(2) 各実施内容

当該年度の到達点①

(目標) 子どもの社会的孤立・孤独に至るプロセス・メカニズムの理解

実施項目1-(1) 孤立・孤独に対するリスク要因間の関連分析

実施内容：2019～2021年度のスクリーニングデータより抽出した児童生徒5,000名を対象とし、「友人関係」に注目して共分散構造分析を行い、各スクリーニング項目(学校適応・問題行動・学習・家庭状況・健康・家庭の経済状況)間の因果関係を推定した。

期間：令和5年4月～令和8年3月

実施者：橋本磨和(大阪公立大学・特任講師)、佐伯厘咲(大阪公立大学・研究員)、黄健育(大阪公立大学・研究員)、山野則子(大阪公立大学・教授)

対象：大阪公立大学・山野研究室が研究協力自治体から提供を受けたデータ

当該年度の到達点②-1

(目標) 評価手法としての学齢版スクリーニングツールの開発

実施項目2-(1) 子どもの主観も含む項目からの支援の方向性を示唆するアルゴリズムのアップデート

実施内容：2019年度のデータに加えて、2020年度のスクリーニングデータを収集し、2年度分のデータを使ってチーム会議提案AIを新規作成した。この作業のためにまず、2020年度のデータ形式と2019年度のデータ形式を確認してエクセルからCSVデータに変換する自動化を注意深く作成した。モデルを初期化してから2年度分のデータをつかってパラメータ調整した。事前テストでサンプルデータに対する挙動チェックを行った後にYOSSシステムに導入された。

期間：令和5年4月～令和8年3月

実施者：中島智晴(大阪公立大学・教授)

対象：2019年度および2020年度のYOSSスクリーニングデータ

当該年度の到達点②-2

(目標) 評価手法としての学齢版スクリーニングツールの開発

実施項目2-(2) 項目の分析

実施内容：子どもたちが社会的孤立・孤独に至る要因の一つとして考えられる「ヤングケアラー」を捉えるための項目を検討した。具体的には、これまでヤングケアラーと関連があると報告されていた項目のうち、YOSSにある項目(授業中の様子・宿題・持ち物・友人関係・保健室来室)を用い、チーム会議にあがる児童生徒のうち、熟練SSWがヤングケアラーと判断した子どもと、そうでない子どもの2群間で、これらの項目でチェック数の割合に差があるかどうかを分析した。
また、子どもの心の状態をスクリーニングに反映するため、開発中の学齢版スクリーニングツールYOSSに、子どもたちが自身の心の状態を入力する「心の天気」を連携させるべく検討を行った。

期間：令和5年4月～令和6年3月

実施者：山野則子（大阪公立大学・教授）

対象：大阪公立大学山野研究室が研究協力自治体から提供を受けたスクリーニングデータ。「心の天気」との連携の検討は、大阪府内の自治体。

当該年度の到達点②-3

（目標）評価手法としての学齢版スクリーニングツールの開発

実施項目2-(3)教室における子どもの行動データの取得と分析

実施内容：教室における子どもの行動データを取得するため、教室へのカメラ設置を模索し、学校現場と交渉を進めた。しかし、プライバシーなどの懸念から、学校現場の抵抗が予想以上に大きく、カメラを設置することはできないとの結論に至った。そこで、別の切り口から子どものデータを取得できないか検討を重ねた結果、株式会社ワコムとの全面的な協力により、市販されていない研究用途のタブレットIoTペーパーの提供を受けることができるようになった。

期間：令和5年4月～令和6年3月

実施者：黄瀬浩一（大阪公立大学・教授）

対象：データ収集に協力いただける学校

当該年度の到達点③-1

（目標）子どもの社会的孤立・孤独を予防するAIスクリーニングシステムが機能する社会的仕組みの開発

実施項目3-(1)AI機能の実装

実施内容：支援ABCもしくは支援不要の4つの選択肢から提案を行うAIを構築した。YOSSから収集された生徒データには支援ABCの指針となる情報が含まれていなかったため、チーム会議提案AIにより高リスク（チーム会議を要する度合いが高い）と判定された生徒データから等間隔抽出して熟練者に支援ABCのラベル付けを依頼した。ラベル付けされたデータを使って支援ABCを提案するAIをニューラルネットワークにより構築した。

期間：令和5年4月～令和6年3月

実施者：中島智晴（大阪公立大学・教授）

対象：大阪公立大学山野研究室が研究協力自治体から提供を受けたスクリーニングデータ

当該年度の到達点③-2

（目標）子どもの社会的孤立・孤独を予防するAIスクリーニングシステムが機能する社会的仕組みの開発

実施項目3-(2)スクリーニングに関わる評価を行う人材養成のモデル構築

実施内容：AIスクリーニング統合型効果的SSW事業プログラム（スクリーニングができるSSW事業を構築するプログラム）およびその実装に資する評価人材（教育委員会担当者・SSW）養成モデルの実施と検証を行った。評価人材の養成に関しては、講座による研修（①）と試行評価調査の現場での活動

(2) を組み合わせて行うOJT形式での評価人材育成モデルの構築を目指した。

①：評価人材養成講座の実施

- ・効果モデルを実施するためにスクリーニングシステムの理解と効果的SSW事業プログラムの理解を目的として、養成講座を開催。
- ・SSW・教員へは効果モデルのマニュアルを活用して養成講座を実施。
- ・SVへは、SSW・教員向け研修会よりも先にSV向けマニュアル（実施・普及フローチャート、戦略・実施プランの作成マニュアル）を活用して実施・普及のために必要なSVの活動の研修会を実施し、その後、SSW・教員向け研修会にも、評価ファシリテーターとして講座に参加した。
- ・講座の前後に自記式アンケートを用いて評価を実施した。

②：AI統合型効果的SSW事業プログラムおよびその実装に資する評価人材養成モデルの試行評価の実施と検証

- ・各学校のニーズ評価
まず各自治体の「効果モデル」に期待するニーズを明確にし、SVとともに効果モデルを実施するための、戦略・実施プランを作成した。
- ・効果モデルの試行評価調査を実施
AI統合型効果的SSW事業プログラムおよびその実装に資する評価人材養成モデルの実施と検証を行った。
- ・モニタリングとSV支援
試行評価調査実施期間中に、SV支援を含む評価人材養成支援を実施した。
- ・アウトカム評価・プロセス評価
実施している効果モデルについて、クラウドシステムに基づくフィデリティ評価、アウトカム評価結果を確認する。SVの訪問時に、SV項目に基づく支援ガイドラインの実施状況についても把握した。また「効果モデル」に関わる担当者（SSWおよび教育委員会と各学校のSSW担当者）を対象にした自記式アンケート調査を、試行評価調査の前後に実施した（主にアウトカム評価）。
- ・効果モデルの振り返りと今後の検討
プロセス評価、アウトカム評価の結果に基づいて、そのモデルを検証し、必要な改訂を加えて効果的な評価人材養成のあり方について提案を行った。

期間：令和5年4月～令和6年3月

実施者：大島巖（東北福祉大学・教授）

対象：AI統合型効果的SSW事業プログラム導入自治体の指導主事とSSW

当該年度の到達点③-3

(目標) 子どもの社会的孤立・孤独を予防するAIスクリーニングシステムが機能する社会的仕組みの開発

実施項目3-(3) スクリーニング実施者養成モデル構築

実施内容：子どもの孤立・孤独を評価するツールを機能的に活用し、スクリーニングを進めるためには、子どもの孤立・孤独の理解やスクリーニングの意義を修得した人材が必要である。そこで、スクリーニング実施者養成講座として、「YOSSマイスター養成講座」を令和5年12月にモデル的に作成・試行した。

期間：令和5年4月～令和6年3月

実施者：木下昌美（大阪公立大学・総括コーディネーター）、山野則子（大阪公立大学・教授）

対象：スクリーニング実施自治体

当該年度の到達点③-4

(目標) 子どもの社会的孤立・孤独を予防するAIスクリーニングシステムが機能する社会的仕組みの開発

実施項目3-(4) 導入アプローチとネットワーク構築・プロセスモデル設計

実施内容：企業と協働し、子どもの孤立・孤独を評価するツールを効果的に活用するための研修コンテンツとしての動画制作を行った。また、広域自治体単位でのネットワークを全国ネットワークに展開していけるよう、YOSS活用研修を定期的で開催して、交流及びネットワークの構築に努め、コンソーシアム設立への布石とした。

期間：令和5年4月～令和6年3月

実施者：木下昌美（大阪公立大学・総括コーディネーター）、山野則子（大阪公立大学・教授）

対象者：スクリーニング実施自治体

当該年度の到達点③-5

(目標) 子どもの社会的孤立・孤独を予防するAIスクリーニングシステムが機能する社会的仕組みの開発

実施項目3-(5) 障壁を乗り越えていくプロセスの明示

実施内容：令和5年4月に施行された改正個人情報保護法に対する自治体の対応について、新たな条例の制定内容を近隣自治体から順次、網羅的に調査を進めた。

期間：令和5年4月～令和6年3月

実施者：宮本貴朗（大阪公立大学・教授）

対象：近畿圏の地方自治体

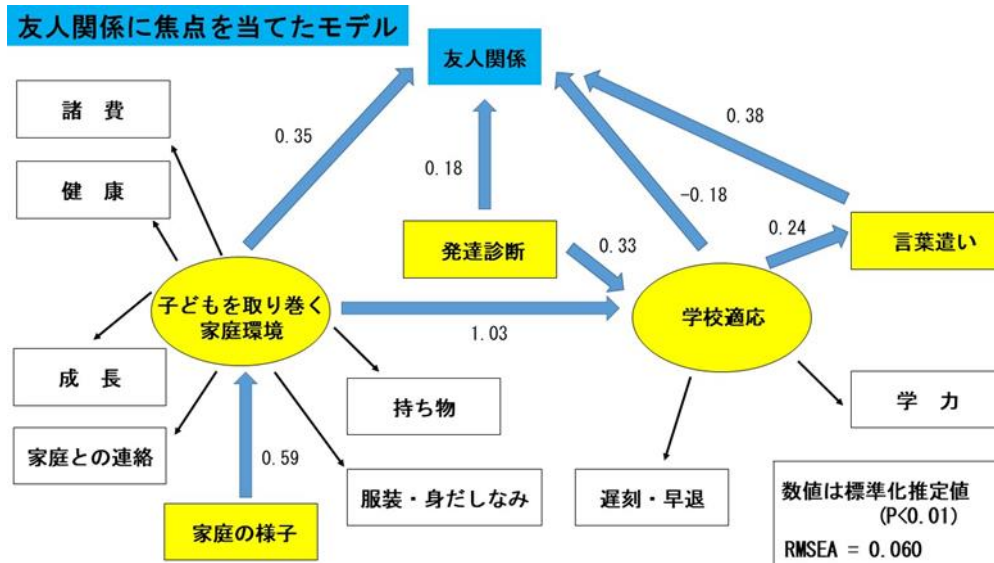
(3) 成果

当該年度の到達点①

(目標) 子どもの社会的孤立・孤独に至るプロセス・メカニズムの理解

実施項目1-(1) 孤立・孤独に対するリスク要因間の関連分析

成果：共分散構造分析の結果、「言葉遣い」「発達診断」が「友人関係」に直接的な正の影響を与えており、「家庭の様子」は「学校適応」といった潜在的な因子を介して「友人関係」に正の影響を与えていることが明らかとなった。



当該年度の到達点②-1

(目標) 評価手法としての学齢版スクリーニングツールの開発

実施項目2-(1) 子どもの主観も含む項目からの支援の方向性を示唆するアルゴリズムのアップデート

成果：開発したモデルを挙動チェックした結果、不具合等は見つからなかったため、YOSSシステムに導入し、現在稼働中である。

当該年度の到達点②-2

(目標) 評価手法としての学齢版スクリーニングツールの開発

実施項目2-(2) 項目の分析

成果：分析の結果、「宿題」と「持ち物」の項目でチェックの割合に有意差が認められた。したがって「チーム会議にあがる」子どものうち、「宿題」「持ち物」にチェックが付いている子どもはヤングケアラーである可能性が高いことが示唆された。

「心の天気」については、YOSSとの連携のためのシステム改修へ向けた打ち合わせを進めるとともに、導入自治体(学校)の選定も完了した。

当該年度の到達点②-3

(目標) 評価手法としての学齢版スクリーニングツールの開発

実施項目2-(3) 教室における子どもの行動データの取得と分析

成果：教室内のセンシングによる子どもの行動データ取得よりも抵抗感が少なく、かつ有効なデータが取得できるセンサとして、株式会社ワコムからの全面的な協力により、市販されていない研究用途のタブレットIoTが利用可能となった。これにより、高いサンプリング周波数（500Hz前後）でデータを取得することができ、筆記に含まれる微小な変動も記録可能であることから、子どもの心理的な状態との関連を分析することが可能となった。

当該年度の到達点③-1

(目標) 子どもの社会的孤立・孤独を予防するAIスクリーニングシステムが機能する社会的仕組みの開発

実施項目3-(1) AI機能の実装

成果：作成したAIモデルをYOSSに実装したことで、熟練SSWが行うABC判定と同等・同レベルの判定をYOSSが出力できるようになった。

当該年度の到達点③-2

(目標) 子どもの社会的孤立・孤独を予防するAIスクリーニングシステムが機能する社会的仕組みの開発

実施項目3-(2) スクリーニングに関わる評価を行う人材養成のモデル構築

成果：AI統合型効果的SSW事業プログラムおよびその実装に資する評価人材養成モデルの試行票の実施と検証

- ・1県と2市において、クラウド評価システムを利用したスクリーニング統合型SSW事業プログラムを実施した。クラウドシステムへの入力と評価結果の分析を行う評価ワークショップを行い、その結果を踏まえて次なる改善の取り組みを、戦略・実施プランを作成して計画することができた。また、クラウド評価システム改善のためのフィードバックを受けて、システムの改善に役立てた。
- ・各地域でSSWer、教育委員会担当者、SV担当者が入力した結果をもとに、評価結果を分析し、共有した。さらに、相関分析のできる地域では各地域の活動がどのようにアウトカムに寄与しているのか、ということについて結果を共有した。
- ・実装ガイドラインの説明を実施し、教育委員会担当者の入力結果をもとに、プログラムを地域内に実装していくための戦略について、各担当者とともに作成した。
- ・各自治体での研修会などを受けて、対象者が使用する「評価ファシリテーションの手引き」を更新した。

当該年度の到達点③-3

(目標) 子どもの社会的孤立・孤独を予防するAIスクリーニングシステムが機能する社会的仕組みの開発

実施項目3-(3) スクリーニング実施者養成モデル構築

成果：令和5年12月16日（土）、17日（日）の2日間で「YOSSマイスター講座」のパ

イロット実施を行った。全国各地より46名の受講者があり、うち認定試験に合格した41名を「YOSSマイスター」として認定の上、修了書を発行した。

また、パイロット実施において受講者アンケートを実施したところ、修了者41名のうち、18名がスクリーニングに関するより専門的な知識・技術の習得を希求していることが分かった。今後は「YOSSマイスター養成講座」の本格始動に加え、より高い専門性を有するYOSSアドバンスマイスターの養成も検討し、体系的なモデルを整備していく。

すべての子どもたちの潜在的なSOSを早期にキャッチして適切な支援につなげる

YOSSマイスター養成講座

参加者募集

支援の見える化、子ども理解が進む

この講座はYOSSの効果を最大化し、教員の負担軽減と教育現場における課題の改善を促進する「YOSSマイスター」を養成するプログラムです。

YOSSについて学び、2つの会議を効果的に進めるスキルを身につけることで、子どもや子どもたちの未来の可能性を拓くことができます。

2023年 10-16時
12月16日(土)~17日(日)

会場 堺市産業振興センター
 (伊丹駅前徒歩10分圏内)
 参加費 5,000円(今年度限定価格)
 対象 YOSSに取り組み、関心のある自治体職員・学校教員・SSWなど

申込 <https://forms.office.com/LJHSCRt4b86>
 締切 2023年11月30日(木)

講師 山野剛子

主催 大阪公立大学 山野剛子研究室



当該年度の到達点③-4

(目標) 子どもの社会的孤立・孤独を予防するAIスクリーニングシステムが機能する社会的仕組みの開発

実施項目3-(4)導入アプローチとネットワーク構築・プロセスモデル設計

成果: YOSS活用研修を毎月実施し、企業との協働により研修コンテンツとしての動画制作(計15本)を行うことで、YOSS導入アプローチ及び企業との効果的な協働をより強固なものとした。また、YOSS活用研修定期開催のプロセスにおいて全国自治体のネットワーク構築を行うことで、スクリーニングシステムYOSSの社会実装推進から始める「こども未来創造コンソーシアム」の準備につなげることができた。令和5年2月26日に実施した「こども未来創造コンソーシアム設立総会(hybrid開催)」では、自治体や企業を中心に300名を超える参加があり、後日配信の動画についても視聴回数は300回を超えた。

動画: Panopto (Panasonicコネクト社) 上に格納。各自治体ごとにIDを発行の上、個人情報に配慮した上で公開している。今後も随時更新していく。

・YOSS活用研修

- 「スクリーニングの意義を学ぶ」
- 「スクリーニング会議」
- 「校内チーム会議」
- 「スクリーニングチェック」
- 「自治体活用報告会」など

・YOSSクラウドサービス操作説明

- 「スクリーニングの実施」
- 「児童生徒の登録」
- 「転校・転入の登録」など



(パナソニックコネクト株式会社より画像使用許諾取得済)

計15本の研修動画を格納している。

動画： [子ども未来創造コンソーシアム設立総会 | 大阪公立大学 \(omu.ac.jp\)](https://www.youtube.com/live/Ogo_Zpkf_1k)
https://www.youtube.com/live/Ogo_Zpkf_1k

当該年度の到達点③-5

(目標) 子どもの社会的孤立・孤独を予防するAIスクリーニングシステムが機能する社会的仕組みの開発

実施項目3-(5) 障壁を乗り越えていくプロセスの明示

成果：自治体の対応について調査を進めた結果、これまでの個々の条例に定められていた独自事項が残存している自治体も多く、また、個人情報を提供する際の審査手続きについても前年度を踏襲している自治体もかなりあることが判明した。

(4) プロジェクトのリサーチ・クエスチョンについて明らかになったこと

Q1. 子どもの社会的孤立・孤独に至るプロセス・メカニズムの解明

今年度は、学校・教室において子どもが孤立・孤独に至るプロセス・メカニズムを友人関係に注目することで明らかにした。今後は学校内に限らず、子どもがどのようなプロセスを経て社会的孤立・孤独に至るのかを明らかにするため、本プロジェクトで定めた子どもの社会的孤立・孤独の定義に従って、さらなる分析・検討が必要である。また、分析に用いているスクリーニング項目についても、学校や教師の間でチェックを付ける基準が異なる場合が確認されている。したがって、今後分析の精度を上げるために、スクリーニング項目の分析上の扱い方についてもさらなる検討が必要である。

Q2. 評価手法としての学齢版スクリーニングツールの開発

これまでの学校現場とのやりとりから、スクリーニングツールについての要望として多かったのが、スクリーニング項目からヤングケアラーをピックアップできないかということであった。そこで今年度、過去のデータを分析することによりヤングケアラーと有意な関連がある項目を抽出することに成功し、次年度、AI判定とは別にヤングケアラーを示唆することができるようシステムを改修する予定である。

また、かねてからの課題であった子どもの主観項目のスクリーニングシステムへの反映について、現場の抵抗感が大きいと取得が困難であった教室での行動データに代わ

り、タブレットを用いた筆記データであれば取得できる可能性が見えてきた。そこで、次年度以降、データ取得に協力してくれる自治体（学校）を選定し、筆記データがスクリーニング項目として有効かどうかを検討していく。

Q3. 子どもの社会的孤立・孤独を予防するAIスクリーニングシステムが機能する社会的仕組みの開発

スクリーニングシステムが社会に受け入れられ、かつ広がっていくためには、スクリーニングシステム自体の精度・機能強化と同時に、スクリーニングに関わる人材の育成やスクリーニングが広まるための基盤づくりが必須である。今年度、実際に養成講座を実施し、スクリーニングに関わる教職員の多くが、スクリーニングに関する専門的な知識・技術の習得を希求していることが分かった。したがって、次年度以降は、現場のニーズを踏まえ、より効果的な養成講座を実施することが必要である。

また、基盤づくりとして今年度「こども未来創造コンソーシアム」を設立した。設立総会では、多くの自治体や企業の参加があったが、今後はさらに多くの自治体や企業を巻き込みながら、子どものより良い未来の創造に向け、産学官が連携して課題整理や解決策検討、政策提言、政策実装支援を実施していくことが必要である。

(5) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

- ・現在の進捗状況としては概ね予定通りであり、AIモデルの作成については完成に近づいていると言える。また、子どもの社会的孤立・孤独のメカニズムの理解についても、次年度で概ね完了する予定である。また社会実装についても、コンソーシアムを設立したことで、これまで以上に前進すると予想される。
- ・次年度の課題としては、プロジェクトを進める上で生じてきた種々の問題（権利関係やシステムの連携など）解決のための検討が必要である。

2-5. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
令和5年4月 ～令和6年3 月	YOSS活用研修	オンライン	YOSSクラウドサービスを効果的に活用するために必要な技術と知識を習得するための研修。
令和5年12月 16-17日	YOSSマイスター 養成講座	大阪府	YOSSの効果を最大化し、教員の負担軽減と教育現場における諸問題の改善を推進する「YOSSマイスター」を要請するプログラム。

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

令和6年3月時点で、YOSSを導入している自治体は34自治体あり、そのうちクラウドサービスは11自治体で導入されている。導入数は今後さらに増加していく見込みである。

4. 研究開発実施体制

(1) スクリーニンググループ

①山野則子（大阪公立大学、教授）

②実施項目

項目1：子どもの社会的孤立・孤独に至るプロセス・メカニズムの理解

(1)孤立・孤独に対するリスク要因間の関連分析

項目2：評価手法としての学齢版スクリーニングツールの開発

(2)項目の分析

項目3：子どもの社会的孤立・孤独を予防するAIスクリーニングシステムが機能する社会的仕組みの開発

(3)スクリーニング実施者養成モデル構築

(4)導入アプローチとネットワーク構築・プロセスモデル設計

(2) AIグループ

①中島智晴（大阪公立大学、教授）

②実施項目

項目2：評価手法としての学齢版スクリーニングツールの開発

(1)子どもの主観も含む項目から支援の方向性を示唆するアルゴリズムのアップデート

項目3：子どもの社会的孤立・孤独を予防するAIスクリーニングシステムが機能する社会的仕組みの開発

(1)AI機能の実装

(3) センシンググループ

①黄瀬浩一（大阪公立大学、教授）

②実施項目

項目2：評価手法としての学齢版スクリーニングツールの開発

(3)教室内における子どもの行動データの取得と分析

(4) 評価キャパシティグループ

①大島巖（東北福祉大学、教授）

②実施項目

項目3：子どもの社会的孤立・孤独を予防するAIスクリーニングシステムが機能する社会的仕組みの開発

(2)スクリーニングに関わる評価を行う人材養成のモデル構築

(5) 情報セキュリティグループ

①宮本貴朗（大阪公立大学、教授）

②実施項目

項目3：子どもの社会的孤立・孤独を予防するAIスクリーニングシステムが機能する社会的仕組みの開発

(5)障壁を乗り越えていくプロセスの明示

5. 研究開発実施者

スクリーニンググループ (リーダー氏名：山野則子)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
山野 則子	ヤマノ ノリコ	大阪公立大学	現代システム 科学研究科	教授
木下 昌美	キノシタ マサ ミ	大阪公立大学	現代システム 科学研究科	総括コーディネーター
佐伯 厘咲	サイキ リサ	大阪公立大学	現代システム 科学研究科	シニア研究員
黄 健育	コウ ケンイク	大阪公立大学	現代システム 科学研究科	研究員
村上 佐和子	ムラカミ サワ コ	大阪公立大学	現代システム 科学研究科	コーディネーター
田中 佑典	タナカ ユウス ケ	大阪公立大学	現代システム 科学研究科	大学院生
三枝 まり	サイクサ マリ	大阪公立大学	現代システム 科学研究科	大学院生
橋本 磨和	ハシモト マロ ワ	大阪公立大学	現代システム 科学研究科	特任講師

AIグループ (リーダー氏名：中島智晴)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
中島 智晴	ナカシマ トモ ハル	大阪公立大学	情報学研究科	教授
藤川 拓海	フジカワ タク ミ	大阪公立大学	情報学研究科	大学院生

センシンググループ (リーダー氏名：黄瀬浩一)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
黄瀬 浩一	キセ コウイチ	大阪公立大学	情報学研究科	教授

評価キャパシティグループ (リーダー氏名：大島巖)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
大島 巖	オオシマ イワ オ	東北福祉大学	総合福祉学部	教授
藤本 優	フジモト ユウ	大妻女子大学	人間関係学部	助教

情報セキュリティグループ (リーダー氏名：宮本貴朗)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
宮本 貴朗	ミヤモト タカ オ	大阪公立大学	情報学研究科	教授

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
令和5年10月8日	子どもを救う「チーム学校」形成へ	大阪公立大学・山野研究室	大阪府（ハイブリッド開催）	約200名	YOSS活用報告会をパナソニックコネクト株式会社と共同で実施。
令和6年2月26日	こども未来創造コンソーシアム設立総会	大阪公立大学	大阪府（ハイブリッド開催）	約300名	子どものためのより良い未来の創造に向けた、産学官によるコンソーシアムの設立総会。

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

- ・「つなぎびと」大阪公立大学スクールソーシャルワーク評価支援研究所発行

(2) ウェブメディアの開設・運営

(3) 学会（6-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・令和5年度主任児童委員研修会（徳島県民生委員児童委員協議会）
「子どもや学校をめぐる現状と課題」、2023年10月13日、徳島県
- ・NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
「子どもと家庭の現状を踏まえた地域子育て支援拠点の役割と期待」、2023年10月14日、徳島県
- ・令和5年度堺市地域福祉フォーラム
「孤立・孤独対策の重点計画に関する有識者会議」の会議メンバーの立場からの報告」、2023年10月19日、大阪府

6-3. 論文発表

(1) 査読付き（1件）

●国内誌（1件）

- ・林 萍萍、山野則子、「コロナ禍における子どもの抑うつに関連要因に関する検討」、子ども家庭福祉学（23）48-61, 2023年

●国際誌（0件）

(2) 査読なし（0件）

6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

(1) 招待講演（国内会議0件、国際会議0件）

(2) 口頭発表（国内会議3件、国際会議0件）

・山野則子、木下昌美、永田麻衣（大阪公立大学）

「導入の仕組みと教員調査の結果」

日本子ども虐待防止学会第29回学術集会・滋賀県・2023年11月26日

・橋本磨和、佐伯厘咲、山野則子（大阪公立大学）

「スクリーニングから見えてきたこと」

日本子ども虐待防止学会第29回学術集会・滋賀県・2023年11月26日

・中島智晴、藤川拓海（大阪公立大学）

「AIによるスクリーニングの支援」

日本子ども虐待防止学会第29回学術集会・滋賀県・2023年11月26日

(3) ポスター発表（国内会議0件、国際会議0件）

6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿（0件）

(2) 受賞（1件）

・グッドデザイン賞（YOSS®クラウドサービス）

(3) その他（1件）

・「ヤングケアラーが注目され…不登校・貧困・孤立に寄り添う『子どもの居場所』」YAHOOニュース、2023年6月

6-6. 知財出願

(1) 国内出願（0件）

(2) 海外出願（0件）